The James Joyce Society of Japan

Newsletter

（ホウスの湾口　写真提供：南谷奉良）

第27回研究大会のご案内

2015年6月20日、第27回日本ジェイムズ・ジョイス協会研究大会が開催されます。会場は**関西学院大学西宮上ケ原キャンパス**となります。プログラムは別紙の通りです。懇親会会場に一カ月前に出席人数を連絡しなければならないため、大変お手数ですが、同封した出欠確認のハガキを５月16日までに投函して下さいますようお願い申し上げます。今回は研究発表要旨・シンポジウム梗概の他にも、イギリス留学中の岩下いずみさんから、ジェイムズ・ジョイス財団ディレクターのフリッツ・セン氏とのインタビュー記事をお寄せ頂きました。

Topics

■第27回研究大会
　研究発表要旨・シンポジウム梗概
　懇親会・会場アクセス
■インタビュー―フリッツ・セン氏と語る
　(岩下いずみ)
■事務局からのお知らせ
■大会プログラム（別紙）

1．研究発表（発表順）

（1）終わらない作文：ジェイムズ・ジョイスの『ある青年の生涯における断章』

——もう一つの『スティーヴン・ヒアロー』——　南谷奉良

月刊誌『ダーナ』に「ある芸術家の肖像」の掲載が拒否された1904年の1月から、ジョイスはおよそ2年に渡って彼の半自伝的小説を断続的に執筆していった。当初は全体で63章という長大な小説として構想されていたが、1906年の3月、物語が25章と総計15万字を数えるテクストにまで成長した時点で、ジョイスはそれ以上の発展が困難であるとし、作品の執筆を放棄した。後年ジョイスはこの物語の未熟さを認め、「学生の作文」にすぎないとして、その公開を望まなかった。しかし弟スタニスロースが提案したタイトルが踏襲され、その作品は『スティーヴン・ヒアロー』という名で現在に残っている。

しかしながら興味深いことには、この物語を書いていた1904年1月から1906年3月の期間にジョイスがスタニスロースと交わした手紙のなかで、彼はその進行中の作品を「小説」や「ぼくの小説」、あるいは略称として“Chapters”と呼びつづけ、ただ一つの例外を除いては『スティーヴン・ヒアロー』と呼んだことはなかった。さらにジョイスはその例外において、“I am not quite satisfied with the title ‘Stephen Hero’ and am thinking of restoring the original title of the article ‘A Portrait of the Artist’ or perhaps better ‘Chapters in the Life of a Young Man’.”として、『スティーヴン・ヒアロー』に替わる新しいタイトルを提案しているのである（1905年2月28日のスタニスロース宛の手紙; *Letters II* 83）。

本研究発表では、まずジョイスが新しく提案した*Chapters in the Life of a Young Man*（試訳の邦題として『ある青年の生涯における断章』と訳し、以下『断章』と省略する）を—未完のまま死後出版された作品*Stephen Hero*と区別し—進行中の作品のタイトルとして捉え、ジョージ・ムアの『ある青年の告白』（*Confessions of a Young Man*）を作品解釈の射程にとりこむ。カトリシズムへの嫌悪、アイルランドからパリへの脱出、新しい自己の創出といった点で、ムアの作品とそのタイトルはジョイスのロールモデルになっていたと考えられる。この比較を通じて、ムアとは異なり、青年ジョイスに固有なかたちで浮かび上がる不可能性——ある青年作者がその青年期を自伝的に書く困難——を指摘し、『断章』の語りに主人公の心的シンタックスが抑えがたく入りこむ特殊な文体をみる。そして書かれてゆくたびにますます終えられなくなってゆく『断章』の不可避的な未完性に注目してみたい。

（2）ジョイス、パーネル、歴史—『若き日の芸術家の肖像』第1章再読

小林広直

1912年、トリエステの新聞『イル・ピッコロ・デラ・セラ』に寄稿した「パーネルの影」(“The Shade of Parnell”)において、ジョイスはひとつの有名な予言を残している——自治を回復したアイルランドにおいて、議会という名の「その宴には一人の亡霊、チャールズ・パーネルの影も出席しているだろう」(“there will be a ghost at the banquet – the shade of Charles Parnell”)。「宴」(festa)と言うとき、おそらく彼の脳裏には、『若き日の芸術家の肖像』(1916)第1章第3節のクリスマス・ディナーのシーンが浮かんだことであろう。アイルランド社会における聖職者の指導的役割を論じていたはずの議論は、いつしか、死んだ「無冠の王」を巡る白熱した政治談義に発展するわけであるが、このPro-Parnell（サイモンとケイシー）と Anti-Parnell（ダンテ）の対立は、第1章第1節において、ダヴィットとパーネルのそれぞれのために捧げられたダンテの2本のブラシに既に暗示されていた。スティーヴンの最初の記憶——五感のすべてに関わる断片的記憶——をめぐる第1節には、ヒュー・ケナーが“The Portrait in Perspective” (1948)で述べたように、「ジョイスが一生をかけて描いてきたあらゆるテーマが表明されていると言っても過言ではない」。

本発表では、『肖像』の第1章、特にその第2節を再読することで、パーネル(の亡霊)とジョイスの関係について再考したい。論点は以下の2点である。第一に、ハンス・ウォルター・ガブラーの1975年の議論——第2節は1891年の10月9日から始まり、死したパーネルのアイルランドへの帰還とスティーヴンの発熱からの再生を一致させる（10月11日未明）——を参照し、クロンゴーズ・カレッジに入学した年齢を「6歳半」ではなく9歳半にしたことの意義を再検討する。第二に、同学校がもとは中世の城であり、ウルフ・トーンの友人であるハミルトン・ローアンが逃げ込んだ場所であったこと、さらには、同校に出没すると噂される「殺人鬼の亡霊」(“the ghost of murderer”)がマクシミリアン・ユリシーズというIrish Wild Geeseの末裔であったことなど、これらの歴史的暗示はHaunted Castleとしてのクロンゴーズというゴシック的なテーマを想起させることを指摘する。スティーヴンにとって人生初であったクリスマス・ディナーのテーブルだけでなく、クロンゴーズ・カレッジにも取り憑く亡霊（たち）を再検討することで、スティーヴンの歴史観におけるその「悪夢」の具体的内容を再考してみたい。

（3）*Ulysses*におけるStephen Dedalusのepiphany

結城史郎

Stephen Dedalusは、*Ulysses*の第３挿話において、epiphanyという美学論を過去のものとして一蹴している。“I was young”(U:3.136-37)で始まるつぶやきは自省の言葉のように響く。epiphanyは*Stephen Hero*で卑俗なもののうちに見いだされる、聖なるものとして語られていた。そして*A*

*Portrait of the Artist as a Young Man*ではclaritasという概念に修正されながらも、やはり卑俗なもののうちに事物の本質を認識するという意味で、Stephenの文学論の基礎をなしていた。

にもかかわらず、*Ulysses*のStephenは、epiphanyを若き日の美学論にすぎないとしているようにも思われる。本当にそうであろうか。*Ulysses*の第２挿話では、生徒たちの喧噪を耳にしながら、“That is God . . . A Shout in the street”(U:2.183-86)と語っている。これもepiphanyの一つではないだろうか。それに加え、第３挿話でStephenは事物の本質を探るため、アイデンティティの問題に憑かれている。Stephenのいう“I was young”という言葉には、美学論とは別の問題が内包されているのではないだろうか。そもそも*Ulysses*もダブリンの一日を描いたepiphanyとも読める。

そこで本発表では*Ulysses*におけるStephenのepiphanyについて考察するが、大きなテーマであるため、第９挿話を中心に論をまとめたい。O. A. Silverman編纂の*Epiphanies*には国立図書館を舞台としたepiphanyが含まれており、しかもその内容が弟の死を扱ったものであることによる。第９挿話の国立図書館でのStephenのシェイクスピア論も、死に関わる問題である。それに加え、死のテーマは宗教と無縁ではなく、epiphanyとclaritasを比較する手がかりともなるかもしれない。さらにStephenが美学論の聞き手として、*Stephen Hero*ではCranly、*A Portrait of the Artist as a Young Man*ではLynchに変更した理由も明らかになると思われる。

（４）ジャーナリズムと戦う芸術家—『ユリシーズ』第7挿話再考

永嶋　友

ジャーナリズムの風が吹き荒れる『ユリシーズ』第7挿話「アイオロス」の終わりでスティーヴンが語る“the Parable of the Plums”は、イエスの例え話の１つである“the Parable of the Sower”との関係が指摘されている。イエスはここで「見るには見るが、聞くには聞くが、理解していない」人々を悟らせるために例え話を使う重要性を説いているが、同様にスティーヴンは「見るには見るが、聞くには聞くが、理解していない」ジャーナリスト達の偽りのヴィジョンに対抗し、自らのヴィジョンを示すために“the Parable of the Plums”を語る。ネルソン塔の頂上で「見上げることも、見下ろすことも、話すこともできなくなった」中年女性2人はプラムを食べ、種を街に吐き出すが、この描写にスティーヴン（ジョイス）の芸術性が秘められている。本発表は、見る・聞くなどの表現に注意を払い、スティーヴン（ジョイス）がジャーナリズムを否定する様子、その中で彼が練り上げた芸術性について考察する。

新聞社に集まる大人達の「見るには見るが、聞くには聞くが、理解していない」という姿勢は、ナレーターによる語りやブルームとスティーヴンの意識の中で形成される。例えば、*Freeman's Journal*社の校正者・印刷者は記事や広告の内容をほとんど確認せずに印刷に回している。また、編集員達は新聞界の偉人や雄弁な演説について自信満々に話し、「歴史を見た」「預言者のヴィ

ジョンがある」などと言うが、実際のところ、彼らはお互いにおざなりな返事をして聞き流しているだけであり、また、彼らの話は内容が乏しいものである。ジャーナリスト達が風見鶏のように政治の動向に従い、理解せず話す人々であるならば、スティーヴンは真理を見通しているが、イギリスやカトリック教会の支配によって表現の自由を奪われている芸術家である。そのため、スティーヴンが語る“the Parable of the Plums”の女性達が塔頂で口を閉ざすも、その後、プラムの種を街にとばすという行動を起こしている点は注目に値する。

第7挿話はレトリックや雄弁術に関する章であり、また、63個の見出しがテクストに挿入されているため、新聞記事との類似性、印刷術の影響、本挿話の文体の特異性などの視点から論じられることが多い。しかし、本発表はスティーヴンの“the Parable of the Plums”が暗示するヒントを基に、あくまでジャーナリズムと戦う芸術家の視点から第7挿話全体を再考することを目的としている。

2．シンポジウム①　「夜の街再訪」

司会：浅井　学（兼講師）講師　小田井勝彦／下楠昌哉／中尾真理

『ユリシーズ』第15挿話「キルケー」のシンポジウムは、およそ20年前の第6回研究大会でも行ったことがある。しかし、その時はMessianic Scene (15:1354-1956)に範囲を限定して精読を行った。今回のシンポジウムではそのような制限を設けず、むしろ逆に「救世主場面」を避けてこの挿話を再考してみたい。「キルケー」は、他の挿話の2倍から3倍の量を持つ長大な挿話であり、いわゆる「幻想シーン」が多用される一筋縄ではいかない挿話でもある。当然考えられるアプローチの仕方も多様なものになる。今回のシンポジウムでは、小田井が「キルケー」で描かれる売春産業の意味を問い、中尾がポスト・コロニアル理論を援用しながらクライマックス場面の意味を考える。下楠はラストシーンで登場するルーディの捉え方について考察し、浅井はこの挿話のテーマの一つである“Magic”について「手品、奇術」という観点から再考する。多様だが、どれも第15挿話の重要な側面にストレートに切り込んで行くアプローチであり、第15挿話「キルケー」とは一体何なのかという問題を考え直すきっかけになればと考えている。（浅井　学）

キルケ挿話と売春産業

小田井勝彦

『肖像』の第2章で描かれているように、ジョイス自身も14歳から売春街に通い、*Dublinersから*Finnegans　Wake*に至る多くの作品で言及がなされ、作品の伏線となっている。「売春」はジョイスの作品における主要テーマのひとつであると言っても過言ではない。そこで本発表では、キルケ挿話において売春産業がどのように描かれているのか、

また売春産業を通じてジョイスは何を描こうとしているのかを考察する。これらの疑問に関しては、Katherine Mullinの*James Joyce, Sexuality and Social Purity* (2003)やCelia Marshikの*British Modernism and Censorship* (2006)といった社会浄化運動との関わりを検証した著作やジョイスの生涯や作品と売春、梅毒との関わりを考察した最新刊のErik Holmes Schneiderによる*Zois in Nighttown* (2015)といった著作があり、今世紀に入ってから考察が大きく進められている。それらの先行研究を辿りながら、今後の研究の可能性を模索していきたい。

妖精か、亡霊か：「夜の街」に現れたルーディに関する一考察

下楠昌哉

第十五挿話「キルケー」のラスト・シーンに登場する、生後十一日目に亡くなったブルームの息子ルーディ。その姿には、これまで長年にわたり数々の解釈が為されてきた。第十五挿話では、『ユリシーズ』にそれまで登場したり言及されたりしてきた人物たちの多くが再び姿を表し、作品の内容がいったん総括される仕掛けになっている。それゆえ、この最後の場面が、多重にシンボリックな意味合いを託されているのは確かだ。その反面、当時の大衆文化に関する諸研究は、ルーディの珍妙な衣装に「見たまま」の要素も少なからず含まれていることを明らかにしてきた。本発表では、亡霊のように登場しながら卜書きで「取り替え子」呼ばわりされているこのルーディのあり方が、見方によっては全く違和感なく受容できることを示したい。ターゲットを小さく絞った発表であるが、本発表から、ここ数年日本ジェイムズ・ジョイス協会大会で行われてきたジョイスのテクストに超自然的要素を見出す試み、あるいは『ユリシーズ』における洗礼の扱いについて、議論を展開することができるかもしれない。フロアからご教示賜れれば幸いである。

「夜の街」における帝国と愛国者の対立：反逆者スティーヴン

中尾真理

第十五挿話「夜の街」に登場する兵士と娼婦の関係には、征服するもの（大英帝国）と征服されるもの（アイルランド）の複雑な構図が描きこまれている。夜の街は兵士たちでにぎわうが、通りの住人は病気持ちや子供など貧しく異様な者ばかりである。ベラ・コーエンの娼家の三人の女性のうち、キティは痩せ細り、フローリーは目に麦粒腫（ものもらい）があり、大柄なゾーイーはヨークシャー生まれである。今回はポスト・コロニアル理論を援用して第十五挿話を読み解き、スティーヴンが兵士に殴られて倒れ、葬儀屋のコーニー・ケラハーに救出されるクライマックス場面の意味を考えたい。本挿話は戯曲形式で書かれ、いかにも舞台じみた、超現実的な夢幻劇のようになっており、壮大なブルームの幻想、それよりは少ないスティーヴンの幻想に、「現実」の場面が入り

混じっている。その「現実」の場面をたどり、ブルームとスティーヴンを取り巻く帝国と愛国者の対立、兵士と喧嘩するスティーヴンについて考える。

3．シンポジウム②「世界文学とジョイス」
司会：若島　正　講師：横内一雄／橋本知子／橋本勝雄／西　成彦

「ジョイスと××」という問題設定ではなく、ジョイス研究よりも広い枠組みの中にジョイスを接続してみること、それがこのシンポジウムの基本的な立場である。従来のジョイス研究にオルタナウィヴな視点を提供することを心がけたい。なお、講師は全員、共通の課題図書として、Adam Thirlwell, *Miss Herbert* (2007)およびFranco Moretti, *Modern Epic* (英訳版1996)の第２部"Ulysses and the Twentieth Century"を読んでくることにした。各発表とは別に、議論の中で取り上げられるかもしれないので、時間のある方は目を通しておいてほしい。（若島　正）

セルバンテス、ジョイス、フエンテス——メキシコからの視角

横内一雄

「世界文学とジョイス」というお題を聞いて真っ先に思ったのは、Joyceとラテン・アメリカ文学の間にどう線を引けるかということだった。もちろん、BorgesやInfanteなど直接Joyceを論じた作家は知られているし、近年では*Decolonizing Modernism* (2010)や*TransLatin Joyce* (2014)やといった研究書ないし論集も出ている。しかし、Joyceと現代メキシコを代表する作家Carlos Fuentes (1928-2012)を結ぶ関係は意外に注目されていない（例外はMorton P. Levitt, *Modernist Survivors*）。本報告では、Fuentesが*Where the Air Is Clear*, *The Death of Artemio Cruz*, *Terra Nostra*といった作品においてJoyceを強烈に意識していることを見た上で、彼が直接Joyceを論じた評論を取り上げ、そこからJoyce文学を逆照射してみたい。ひいては、世界文学地図における重要なミッシング・リンクの一つを指摘できれば幸いである。

ジョイスの川上に、ジョイスの川下に

橋本知子

フランスにおけるジョイスの潮流をふりかえるにあたって、発表は二部形式をとる。第一部ではジョイス「以後」に注目し、『ユリシーズ』出版（英語版1922、フランス語版1929）がフランス文学に与えた決定的な影響のひとつとして、内的独白に焦点をあてる。「現代文学が自意識を持つようになったのは内的独白においてであり、また内的独白によってである」とサルトルが言うように、『ユリシーズ』出版以前と以後でフランスの文学風景はラディカルな変化をとげるにいたるが、そうした変化をタイポグラフィー

的に前景化している作品を時系列に沿って概観してゆく。対して第二部では「ジョイス以前」を探るにあたり、フロベールを例にとり、エピファニーという極めてジョイス的な主題をフロベールの作品に見出してゆく。しかしそれはジョイスにおけるフロベールの影響としてではなく、むしろフロベールにおけるジョイスの影響として、あるいはピエール・バイヤールのいうような「予めの剽窃」として捉えうるものである。このように二人の作家のテクストをa-chronologicalな関係におくことによって、世界文学と対位法的読解の可能性について考えてゆく。

ジョイス、ズヴェーヴォとガッダ——イタリアから見たモダニズム小説

橋本勝雄

本発表では、ジョイスとイタリアについて考えられるテーマのなかから、二人のイタリア人作家イタロ・ズヴェーヴォ（1861-1928）とカルロ・エミリオ・ガッダ（1893-1973）との関連に焦点を当てる。

ジョイスが作家ズヴェーヴォの誕生に二重の意味で貢献したことは知られている。文学活動を断念していたズヴェーヴォは、1907年にトリエステで英語の個人教授をしていたジョイスに自作をほめられたことから執筆を再開する。1923年に出版されたがイタリアではやはり注目されなかった小説『ゼーノの意識』をパリの文壇に紹介したのもジョイスだった。しかし、両者の作品を比較すると、たとえば『ゼーノの意識』と同じ時期の『ユリシーズ』とのあいだにはっきりとした類似や影響関係があるとは言いにくい。むしろ作品論としてジョイスと比較が試みられるイタリア作家は、『メルラーナ街の恐るべき混乱』(1957)や『悲しみの認識』（1963）のガッダである。

ジョイス、ズヴェーヴォ、ガッダの作品を通して、イタリアから見たモダニズム小説について考えたい。

プルースト、ジョイス、ゴンブローヴィッチ

西　成彦

『ターミナルライフ／終末期の風景』（作品社、2011）のなかで、私はプルーストから、ゴンブローヴィッチ、さらにはベケットに至る流れを追いかけたつもりでいるが、そこに「ジョイス」を挿入すればどういうことになるか。

1904年生れのゴンブローヴィッチは、早くからフランス語は身につけていて、また、大学卒業後に一年間フランスで遊学を決めこんだ経験もあったから、プルーストばかりでなく、ジョイスを読んだのもフランス語でだった。1939年に南米アルゼンチンに渡っ

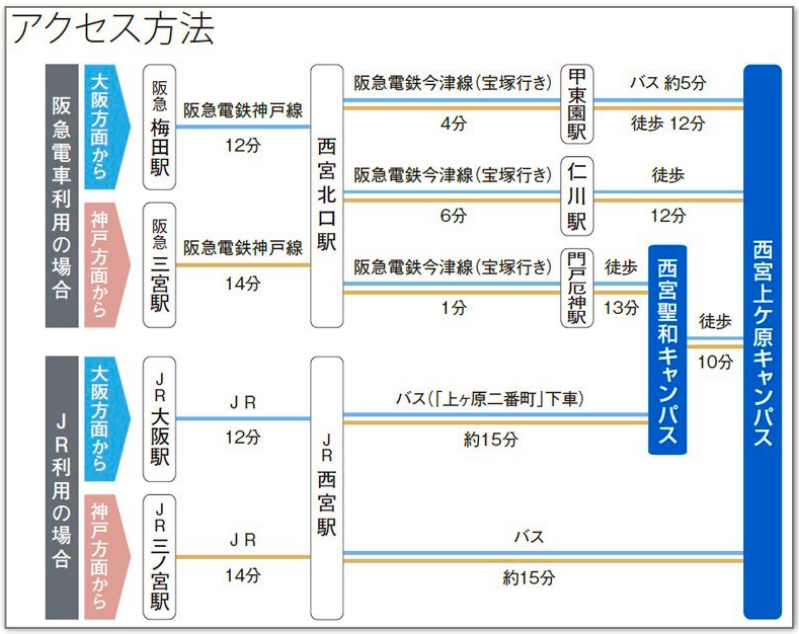
た彼は、世界的な名声を夢見て、代表作『フェルディドゥルケ』（1938）のスペイン語訳やフランス語訳に挑戦し、また「亡命文学」の範疇に属する作品を次々に書き上げた。そんな彼が、自分よりも一足早く「世界文学」の地位を獲得したジョイスやボルヘスにライバル意識を燃やしたことは言うまでもないことだが、百花繚乱の感のあった「20世紀小説」のなかで、ジョイスとゴンブローヴィッチをつなげて考えることで何が見えてくるのか？「亡命文学」と一口に言ってみても、その様態はさまざまである。時間があれば、ゴンブローヴィッチと同じ年に同じくロシア領ポーランドで生まれて、1935年に渡米したバシェヴィス・シンガーにも言及したい。本人がユダヤ系であろうがなかろうが、「20世紀小説」のなかで「ユダヤ人」が果たした役割は途方もなく大きいのである。

懇親会について

大会終了後には懇親会が行われます。会場は、同じく関西学院大学キャンパス内にある関学会館（翼の間）となります。懇親会費はドリンク込みで5500円です。事前にお振込みください。多くの方々のご参加をお待ちしております。懇親会会場は大会会場（F号館）の隣にあります。別紙の大会プログラムの裏面にある地図をご参照ください。

西宮上ヶ原キャンパスまでのアクセスと宿泊施設について

大会会場までの詳しいアクセスについては、別紙の大会プログラムの裏に記載されてある地図をご参照ください。関西学院大学は、大阪・梅田、神戸・三宮、宝塚の中間地点にあるため、宿泊場所はそのいずれかの場所にお取りいただき、阪急電車で移動するのが無難ではないか、というアドバイスを関西学院大学の横内先生からいただきました。西宮市内に宿泊施設を取ると、市内の移動が大変なようです。



インタビュー

フリッツ・セン氏と語る

岩下いずみ

幸運に恵まれ、2014年7月よりおよそ２か月、Zurich James Joyce Foundationより奨学金を得て同財団において研究生活を送ることができました。研究期間終了間近、財団ディレクターであり、長年活発に研究活動を行っているフリッツ・セン氏にインタビューを行うことができました。以下はその内容をまとめたものです。

岩下　財団の主な目的について教えてください。

セン　ジョイス関連の図書、記事、写真など種々の資料の保管・提供を行い、研究のための場を設け、それらの活動について様々な人々に知らせていくことです。財団には、週４回のリーディンググループ（『ユリシーズ』２回、『フィネガンズ・ウェイク』２回）以外では週に平均して５，６人ほどの訪問客がありますが、その目的は千差万別で、研究、または観光ということもあれば、単なる雨宿りのためということもあります。

岩下　毎年夏に財団ではワークショップを開催されています。2014年のワークショップ（テーマ：“Wandering”）についての感想をお聞かせください。

セン　他のジョイス学会とは何か違うことをするというのがワークショップの主目的です。そのため、発表者に対しては原稿を読むことを禁止し、発表者と聴講者がよりインタラクティブに意見を交換できるような取り組みにしています。またワークショップを実施する部屋の広さの面でも約20名の定員としていますが、少人数のため意見交換がしやすいと思います。基本的にテーマに基づいてジョイス関連の発表を行うのであれば誰でも歓迎です。2014年のワークショップはテーマも良く、若手参加も多く良い結果となりました。

岩下　毎年どれくらいの学会に参加されていますか。

セン　ヨーロッパで開催されるジョイス関連の学会に参加しています。2014年は2月のローマ学会、6月のユトレヒト学会、トリエステとダブリンのサマースクールに参加しました。

岩下　日本を訪れた際の思い出について教えていただけますか。

セン　日本を訪れたのは大変良い思い出です。素晴らしい対応・案内をしていただきました。日本は高齢者に対しての態度がヨーロッパと異なりますし、英語の発音についても大きく異なりますね。ジェイムズ・ジョイス協会での講演の際、一人の男性研究者が私の講演後に質問したので

すが、話し方から講演内容についての批判かと思いました。が、実は逆で、彼は私の崇拝者であったことが後でわかりました。

日本のジョイス研究者を多く知っており今でも交流があります。中には財団奨学生であった研究者もいます。日本にはジョイス関連の研究書も豊富にあることも知りました。

岩下　日本のジョイシアンへのメッセージはありますか。

セン　日本のジョイシアンはすでに素晴らしい研究をしておられると思います。コミュニケーションでの困難などあるかもしれませんが、より積極的に国際学会などに出て他の国の研究者と交流することも良いでしょうね。

岩下　ジョイス以外、またジョイス作品に対する現時点での興味・関心の対象について教えていただけますか。

セン　研究という観点で言うと、ジョイス作品以外の研究についての関心は、今はあまりありません。ジョイス作品についての興味・関心も今はより狭くなっているように感じます。

岩下　ジョイス作品で一番好きなものは何でしょう。

セン　現在は『ユリシーズ』です。ずいぶん長い間、『フィネガンズ・ウェイク』に強い関心を持ち、研究ネットワークも駆使しながら研究に取り組んできましたが、ある時点で完全に『フィネガン』を理解することは不可能だと気づき、『ユリシーズ』に主眼が移行しました。ジョイスが「どのように(how)」書いたか、特に言語が作品の中でどのように働いているかに興味があります。一方で、現在大きな高まりを見せているジェネティック・スタディーズに対して、自分にはアンビヴァレントな部分があります。その研究結果を知ることは喜ばしいですし、研究している方々には頑張ってほしいと思うのですが、自分の研究に対しては有効ではないように感じています。

岩下　では、『ユリシーズ』で気に入っている挿話は何でしょうか。

セン　「ナウシカア」と「エウマイオス」です。前半のブルームの章も好きです。反面スティーヴンの章には少し心地悪さのようなものを感じます。スティーヴンよりブルームに私が親近感を抱いているからかもしれません。また、日本で再度講演を依頼されたとしたら「キルケ」のような難しい章は選ばないでしょうね。

岩下　アクティブに研究を続けられる秘訣を教えてください。

セン　私はもともと内気な性格でしたが、ジョイス研究で様々な人と同じ興味を分かち合うことで人々と交流を持てたと思います。その事もあり、現在も学会で一人でいる若手研究者に積極的に話しかけ交流して、彼らが打ち解けられるようにしています。またジョイス学会自体もヒエラルキー的な縛りがなく、比較的自由な、意見を出しやすい楽しい場だと感じています。

　センン氏は以上の内容を非常にわかりやすく熱心に、独特のユーモアあふれる語り口で長時間話してくださいました。インタビュー内容にもありますが、氏は財団で活動しておられると共に、主にヨーロッパで開催されるジョイス関連学会やサマースクールでの講演、執筆活動などでも精力的に活躍されています。今後も氏が末永く活発な研究活動を続けられることを祈願しますと共に、財団を訪れたことがない方にはぜひ訪問されることをおすすめいたします。ちなみに、2015年の第30回記念ワークショップはすでに参加者の定員上限に達したということでしたので申し添えておきます。

事務局からのお知らせ

協会費・懇親会費について

毎度のお願いとはなりますが、会費・懇親会費は、協会の口座へのお振込みをお願い致します。振込用紙をご利用の場合は、郵便局や金融機関に備え付けの用紙をお使い下さい。恐れ入りますが、お振り込みの手数料は会員の皆様にご負担いただいております。ゆうちょ以外の銀行からのお振込みの場合、下記の振込先となりますのでご注意下さい。

▪銀行名：ゆうちょ銀行　▪金融機関コード：9900　■店番：048

▪預金種目：普通　▪店名：〇四八店（ゼロヨンハチ店）

▪口座番号：0185454

協会メールアドレスの変更

協会の連絡先が変わります→ joyceanjapan(at)gmail.com

［※ (at) の部分を@にして下さい］

これまで協会のメールアドレスとしてsean_jjsj_since08june(at)ybb.ne.jpを使用してきましたが、2015年4月より上記アドレスに変更となりました。お手数ですが、上記枠内のメールアドレスのご登録をお願い致します。

連絡先

日本ジェイムズ・ジョイス協会 事務局　〒420－0911　静岡市葵区瀬名1-22-1
常葉大学外国語学部英米語学科　戸田勉研究室内
協会ホームページURL：http://www.joycesocietyjapan.com
メールアドレス：joyceanjapan(at)gmail.com［←(at)を＠に］※住所変更をされ、このNewsletterが転送で届いた方は、お手数ですが上記事務局宛までお知らせください。（e-mail可）